

浄

monthly
JŌDO

土

2008
July
August
合併号

78

法然上人鑽仰会





たとい無間の重罪なりといとも
称名の功德にはかつべからず。
利剣即是弥陀号。
たもてば魔縁ちかづかず。
一声称念罪皆除。
称えば罪業のこりなし。

(平重衡の問いに念仏往生を示す御詞)



鬼海弘雄『浄土』2008年年間表紙写真の人

きかいひろお 1945年山形県寒河江市生まれ

法政大学文学部哲学科卒業。山形県職員を辞して、トラック運転手、造船所工員、遠洋マグロ漁船乗組員など様々な職業を経て写真家に。1973年より浅草寺で人物写真を撮りはじめる。

APA賞特選、日本写真協会新人賞、伊奈信男賞、「写真の会」賞受賞。

写真集「PERSONA」で第23回土門拳賞受賞。

写真集

『王たちの肖像：浅草寺境内』矢立出版1987年、『India』みすず書房1992年、『や・ち
また：王たちの回廊』みすず書房1996年、『東京迷路』小学館1999年、『印度や月山』
白水社1999年、『しあわせ：インド大地の子どもたち』福音館2001年、『Persona』草
思社2003年、『べるそな』草思社2005年、『In-between8 鬼海弘雄 ポルトガル、マル
タ』EU・ジャパンフェスト日本委員会2005年、『東京夢譚』草思社2007年、『集合住
宅物語』みすず書房2004年(撮影・鬼海弘雄 文：植田実)、『メッセージ』樹立社
2006年(撮影・鬼海弘雄 文：都はるみ)

浄土

2008/7・8月号 目次

源氏物語の仏教	魚尾孝久	2
会いたい人 坂東三津五郎さん③	関 容子	8
響流十方	林田康順	16
江戸を歩く 第十八回	森 清鑑	20
仏教コラム	大室了皓	29
法然上人をめぐる人々	石丸晶子	30
Jフォーラム		43
誌上句会	選者=増田河郎子	44
読者の声		46
マンガ さっちゃんはねっ	かまちよろう	47
編集後記		48



表紙題字=中村康隆前浄土門主
アートディレクション=近藤十四郎
協力=迦陵頻伽舎

源氏物語の
仙教

魚尾孝久

三島願成寺住職
大正大学講師

『源氏物語』が書かれて千年になるということ、京都ではいろいろなイベントが催されている。大学の公開講座や自治体の文学講座では、『源氏物語』がいちばんの応募者だという。千年たっても衰えることのない、むしろますます人気があがっているのは何故だろうか。

私もささやかであるが、『源氏物語』の講座を主催している。その受講者のなかに、元海上保安庁の職員の方がいた。ある国の港でのパーティーで、『源氏物語』についての質問攻めにあったという。まったく読んだことのなかったその人は、「自国の国際的な文学作品を読んだことがないのか」と質^たされたことにショックを受け、定年退職後はともに『源氏物語』を読むこととなり、楽しい時間を共有したものである。

『源氏物語』は、とくに女性に人気がある。正確には、光源氏の人気といえよう。『源氏物語』のある講演で、『源氏物語絵巻』から光源氏の顔をスライドで大写しにして話をした。さぞかし喜ばれると思ったが、否、大不評なのである。これほどまでに手をかけたことが、余計なことであった。女性たちは、『源氏物語』を読み、講演を聞き、頭のなかには素敵な光源氏の像ができあがっており、密かに大切にしていたのであろう。きっとその光源氏の姿は、初恋の人や若きころのご主人に似ていたのかもしれない。それをスライドが、ことごとく打ち壊してしまったのであるから怒り心頭である。

当時の美男子は、ふっくらとしてちよは髭をたずさえ、まさしくメタボおじさん風で、現代人から見ると絶対に受け入れられない姿であった。絵巻に描かれた人々の姿を多少擁護するに、いまの私どもからすれば、たとえ貴族といえども食べ物粗末なものであった

だけに、男も女もふくよかなことが美男美女であった。高松塚古墳の美人像、薬師寺の吉祥天女像のふくよかさを思い出していたければ納得されるだろう。

ご婦人たちには、とても受け入れがたいばかりか、長年のあいだ懷いてきた光源氏の姿を壊されてしまったのであるから、私への非難は激しいものがあつた。二度と興味本位やいらぬ親切心で、光源氏の姿は語るまい。

『源氏物語』の人氣、光源氏の魅力ということで考えると、『源氏物語』が単に色恋の物語ではなく、光源氏が俗にいう色男で多情な男というシチュエーションばかりではないところがあるのでなからうか。当時は男社会であり、何人もの妻をもつことが普通のことであり、男が女のところに通わなくなれば、夫婦関係ですら消滅してしまうものであつた。ご承知のように、光源氏もつぎつぎと女たちとの戀愛を重ねていくが、女性の読者に反感をかうことはなかつた。

それは光源氏がひとつひとつの戀愛に真剣であり、全力で愛しその結果として苦惱することが絶えなかつたところにある。女もまた恋の末、身の置きどころをなくして仏の道に救いを求めるのである。真剣に恋をし、その結果の苦しみを真剣に受け止めているところに共感を持たれるのであらうか。

光源氏は、三歳の時に母親桐壺更衣が亡くなっているだけに、育ててくれた乳母への思いは深いものがあつた。その乳母が病床につくと見舞いに行くが、その隣の屋敷の女（夕顔）に関心を持ち、身分を隠していつしか通う仲となる。ある時その夕顔を伴つて外出す

ると、六条御息所の「もののけ」に襲われ、夕顔を死なせてしまう。その始末は隨身である惟光に任せる。一般的にはそれですべてが終わりであったが、光源氏は決してそのまま終わりにしてしまうのではなく、最期は自ら出向いてまで惜別するのである。この時点では素性すら判らぬ女であっても、自分のおかれた立場をも顧みず弔う光源氏の姿は、当時の読者ばかりでなく、現代の人々にも好感をもたれるところであろう。

やはり好色である光源氏は、大きな事件を犯してしまう。母桐壺更衣の亡き後に帝のもとに入内した藤壺に母親の面影を求めるが、それはいつしか強い憧れとなっていく。藤壺の里下がり、この機会を除いての逢瀬はないのである。里邸を訪れた光源氏は、過ちを犯してしまい、藤壺は帝ではなく光源氏の子を産むこととなる。そればかりか、その子が冷泉帝として即位していくことになる。

光源氏と藤壺の罪障は、はかりしれないものがあつた。作者紫式部はストーリーの展開のなかで、光源氏の子が帝の位についてしまうことになかなる整合性をもたせていくのであろうか。この問題は当時の読者ばかりでなく、私どもも注目するところであり、源氏物語の評価のさだまることであろう。現実社会を無視したストーリーは、決して受け入れがたいことは無論である。ふたりはたった一度の過ちで、生涯はかりしれない重荷を背負って生きていくことに、現実性が、真実が隠されているのかもしれない。

自分の犯した罪は、たとえ天子さまの第二皇子として生まれてきた光源氏であつたとしても、庶民と変わらぬ責任を免れることは絶対にできないのである。帝であろうと庶民であらうと、その行為の評価というものは絶対評価であり、その評価せしめるものは仏であ

り神であつた。この作者の姿勢こそ、読者に普遍的な感動を与えたといつてよいだろう。

光源氏は、この現実を遠くから見守るしかすべがない。藤壺は事の発覚を恐れ、ひたすら光源氏を避ける。決してみずから犯した罪を逃れようというのではない。我が子の出生の秘密を死守することに徹したものであり、そこには女としての人生はすでになく、母親として生きる姿は痛々しいものであつた。

桐壺院が崩御すると、藤壺は院の一周忌の法要にあわせ法華八講を催し、その結願の日に出家する。光源氏の留意など、聞く耳を持つていなかった。犯してしまった罪障の懺悔、そして我が子の出生の秘密をいかにして護るかが大切であつたからである。自業自得とはいえ、光源氏と藤壺がどんなに苦悩のなかにあつても、紫式部はふたりを許すことはなかつた。その罪はどんなに懺悔したからといつても消えるものでもなく、また許されるものでもなく、どこまでも背負つていかなければならない。我々がそれを知るのは、藤壺がこの世を去つてからのことである。

ふたりのあいだに生まれた子が、冷泉帝として即位する。あるとき、冷泉帝の周りに人の気配のない折、年老いた聖は冷泉帝にその出生の秘密を告げる。冷泉帝の戸惑い、それ以上に光源氏の動揺は計り知れないものであつた。聖はなぜ命をかけてまで告知したのであろうか。聖は「出生の秘密を告げることによつて、たとえ命を落とすことになつてもやぶさかでない」という。真実を知つた以上、それを隠すことは仏の心ではないのだという。それは仏も神も知るところであるからである。

紫式部は、どこまでもふたりに厳しい現実を突きつけていく。それでなければ、犯した罪の大きさからいって読者が納得できないことを承知していたのである。

藤壺は、この事実を自分の胸の内に秘めたまま生きていくことはできなかったのである。聖に懺悔いたし、滅罪の日々であった。きつと帝の出生の秘密を護ることは、滅罪にはならないことは充分に承知するところであつたろうが、それだけは譲ることはできなかったのである。

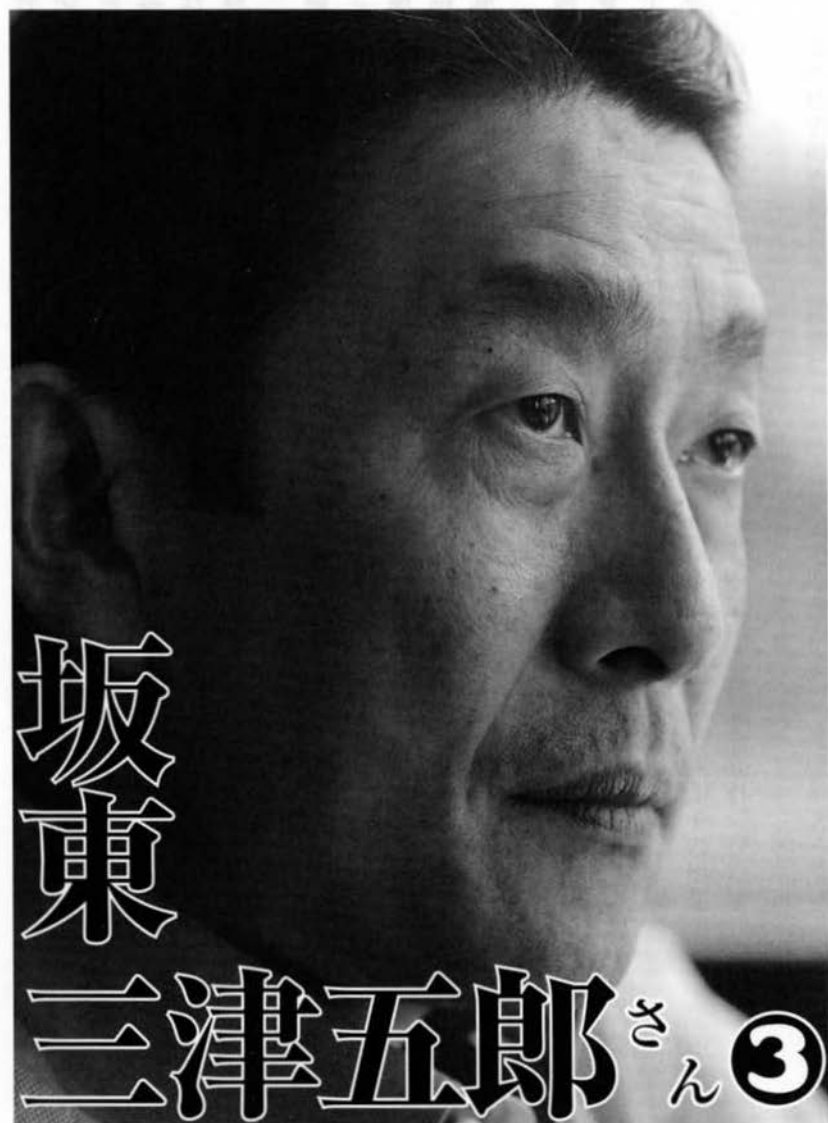
冷泉帝は譲位をも考えるが、帝も光源氏もこの現実を背負って生きていくしか方法はなかった。

それでは皇胤に乱れが生じてしまう、冷泉帝と后である秋好中宮とのあいだには皇子を儲けることは、紫式部は絶対に許さなかった。冷泉帝の譲位のあとは、朱雀帝の東宮が即位して、皇胤の乱れを是正しているのである。

「人間が真実を枉^まげて生きることが、み仏のみに背くことである。」という考えが、『源氏物語』の普遍性を物語っているように思われてならない。

連 載

会いたい人 関 容子



坂東

三津五郎さん ③

撮影／タカオカ邦彦

三津五郎さんと語るときに、踊りの話は欠かせない。第一、日本舞踊坂東流の希望の星として誕生した後継者だったわけだから。

「ひいじいちゃん（七代目三津五郎）が一度危篤状態になったときに、猿翁（二代目猿之助）さんや時播磨（三代目時蔵）のおじさんとかがお別れに来て、そこへ両親がぼくを抱っこして来ました。ぼくが、じいじ、と言ったら、おお坊主、よく来たな、って生き返っちゃって（笑）、それから四年生きました。そのうちにぼくが踊りの科を作ったりし始めたので、そろそろお稽古にやりましょうか、って母が曾祖父に訊ねたら、そこらに預けて変な癖がつくといけない、わたしが元気になるたら稽古をするから、って。踊りの名人と言われた人にそこまで期待されていたから、怠けちゃ申しわけないし、流派の名取りたちも全員お目つけ役みたいに、じいーつとぼくを見る。いつも試験受けてるみたいで重圧を感じましたね」

三津五郎さんは昭和三十七年九月の歌舞伎座で五代目坂東八十助として正式に初舞台を踏む。二代目尾上松緑の『鳥羽絵』でねずみを踊った。「極り極りもきつぱりした踊りで、前途有望」と評判を取り、雑誌のインタビューで「御飯と踊りとどっちが好き？」と訊かれると、すかさず「踊り！」と答えている。

「でも、ぼくが初めて踊りの楽しさがわかったのは、四十を少し越えて『奴道成寺』を踊ったとき（平成九年）からですよ。それまではレシビを見て分量を確かめながら料理してたようなのが、大づかみにパツパツとつかんで自由に踊れた気がした。今は踊ることがとても楽しいですね。しかし悲しいかな踊りは肉体あつてのものだから、踊りの何たるかがわかってきたころ膝が痛くなったりして身体がきかなくなってくる。芝居は別として、ちやんと踊れるのはあと十五年？二十年？と考えますね。最晩年の紀尾井町（二代目松緑）のおじさんが、俺は今なら完璧に弁慶が



できるけど、皮肉なことに身体が言うことをきいてくれない、つてしみじみおっしゃってました。これは役者の宿命でしょうね。経験を積んで、内面も充実して、身体も動いて、といういい時期は、役者人生の中でもかなり少ないのかもしれないですね」

三津五郎さんは今まさに役者ざかりの只中にいる。粹でいなせでピチピチとした踊りは観逃せない。

ところで三津五郎さんの人気がブレイクしたのはいつだったろうと振り返ってみると、どうやらNHKの朝の連続ドラマ『おていちゃん』（昭和五十三年）の幸太郎兄^{あに}ちゃんか

らしい。この年にファンクラブの「八十助応援団」が発足し、「せばんごう80」という機関誌も出るようになった。

「テレビはその前、十九のときにNHK少年ドラマの『怪傑黒頭巾』に出ていて、これも結構今でも言われます。昼間は易者で、夜は黒頭巾かぶって親の仇を探ね歩くという話。でもポーンと人気が出たのは『おていちゃん』ですね。投書がいつぱい来て、どんどん兄ちゃん役の出番が増えて行きました」

『おていちゃん』は女優の沢村貞子の随筆による一代記ふうのドラマで、おていちゃんは友里千賀子、父徳之助は長門裕之、母お力ツは日色ともゑ。八十助扮する幸太郎というのは沢村国太郎（長門裕之、津川雅彦兄弟の父）のことで、妹をかばう心優しい兄さん役を爽やかに好演し梨園育ちのすつきりとした男前を全国に印象づけた。なお、弟の直次というのは加東大介のことで、この役はやはり歌舞伎の中村翫雀（当時智太郎）が演じた。

「翫雀君とは兄弟役で共演しましたから今でも仲がいいですよ。とにかく、このドラマが当って視聴率五十%なんていう、今では考えられない数字が出たりしたので、終るとすぐに新派の舞台にかけられて、おていちゃんには波乃久里子さん。兄と弟の配役は変わらずにぼくと翫雀君でした」

続いてのテレビ出演は、テレビ朝日の『朝のテラス』の司会。月曜から金曜まで朝十五分のトーク番組だった。

「司会で一年間、いろんなゲストの話を聞くわけですけど、とにかくぼくは小学校からずっと青山学院で受験の経験はなし、就職試験の経験もない。まだ結婚もしてないし、二十二、三の若造が、司会は無理ですよ。第一回ゲストには中村メイコさんをお迎えしました。事前に打合せたことが本番になると全然頭に浮かばないんです。ナマ放送じゃないけど、完パケと言ってその時分録り直しなんかしてくれませんかから緊張します。好きな色は



NHK連続ドラマ「おていちゃん」共演者とともに。右端が八十助（現・三津五郎）

何ですか？ とかつまんないことばかり訊いてたら、メイコさんが助け舟で、朝の牛乳っておいしいわね、って。明治乳業の提供だったのですからね。助け舟を出してくれたんです。そしたらばく、牛乳は大っ嫌いなんです、って言っちゃって（笑）、八十助さん、これから努力して牛乳飲むようにします、と言うように、そう書いた紙を見せられました。その後、たくさんの方にお会いしましたけど、司会は最後までダメでしたね。でもこれに出たおかげで、人前で話すことが平気になって、昭和五十四年から『関西で歌舞伎を育てる会』公演の『歌舞伎の観方』の解説を仰せつかって、好評で五年間続けましたから」

このころから歌舞伎界も若手花形八十助に断然注目するようになり、十代目三津五郎襲名までを順調に歩み続けて行くことになる。

「八十助でいるうちは言わば部屋住みの名前だし、親がいて、いざとなればかばってもら

えるからいろんなことに挑戦できたけど、十代目を継いだら何千人というお弟子を束ねて行く責任上、仕事の種類も自然と限られてくるだろうなと覚悟はしてたんです。でもコクーンとかパルコとか本多劇場とかへ行くとかくさんのチラシを渡されて、東京中で今こんなに芝居をやってるのか、と驚かされる。そのうちに、三津五郎でもなければ大和屋でもない、坂東流家元でもないところで、自分の、というより皆さんの思ってるほどのカラを、破つてみたいなという気が起きてきたんです」

それが平成十九年夏、劇団ダンダンブエノの『砂利』への出演につながってくる。私も青山スパイラルホールのこの公演を観に行ったが、舞台前方に敷きつめた砂利を三津五郎さんが踏んで現われるサクサクという乾いた音が、今も耳の底に残っている。何とも不思議な芝居だった。

「たまたまダンダンブエノの酒井敏也さんとテレビドラマで共演したときに、この劇団は

三人だけがレギュラーで、あとはその都度ゲストを迎えて芝居を作るんです、と聞いたので、じゃあ、ぼくも呼んでもらえるの？　って言ったら、え？　嘘でしょ、って言われたけど、すぐスケジュールを出して、三年後の出演を約束したんです。四十五年間役者やって経験したことのないことをずいぶんやりましたから、面白かったですよ。普通、稽古に入る前に台本が来て、読んから返事をするでしょう。それが台本はなくて、まず出演者六人が決まるんです。六人の出たとこ勝負で、双六公演（笑）。それで集まって、エチュード（即興劇）を始める。では、バスがエ

ンコしちゃったという状況で……ハイ、と言われて何かやり始めるんです。夏に公演する前年の暮れから、このエチュードに入りました。ぼくが最初に与えられた設定は、バイトしながら六畳一間で暮している孤独な男。その部屋の押入れにどうしても入りたいと言ってやってくる女がいて……という同じ設定で

田中美里、片桐はいりの二人が交替で演じると、変な女であるそのあり方が、二人で全く別のストーリーになる(笑)。そういうことをしてるうちに、役者の相性とか、かくれてる本質の部分を見極めて、本谷有希子さんが台本を書く。倉持裕さんが演出する。面白い才能のある人があちこちにいるものだなあ、と思いましたね」

三津五郎さんはまず「バイト」という言葉を聞いて、そこからしてもう喰ったという。アルバイトなどしたことがなかったから。

「銀河系の星の数より多いと言われる人間の細胞って、半分も使われないで死んで行くわけですよ。四十五年もたったからもう一生大丈夫だろうと安心して休んでた細胞に、え？ 今ごろオレたち出番なの？」と思わせたかった(笑)。それで本来の歌舞伎で使ってる細胞に、いい刺激が与えられればいいな、と思ったんです。普段、ぼくはプロ中のプロたちと仕事してますから、こういう手編みの

セーターを一針一針編んで行くみたいな芝居作りの体験を、大事にしたいなと思ったんです。だから最後の打上げのときは、別れがつかなくてももう号泣しちゃいましたものね」

その本来の歌舞伎の細胞にも、え？ と思わせる役への挑戦があったように思う。それは平成二年一月の浅草歌舞伎での荒事の『鳴神』。この配役には観る側もちよつと驚いたが、かつきりと骨太で、立派な鳴神上人だった。

「ぼくは自分の仁とか柄とかいうものが、二枚目とか世話物に向いていると思ってたんですが、鳴神を振られて、開き直って瞬発力が出たんでしょうか。ぼくの先入観がパーッと解き放たれた気がします。考えてみれば曾祖父の七代目は、荒事の『矢の根』の五郎や『車引』の梅王を得意とした人でしたからね。これがターニングポイントになって、それから『勅進帳』の弁慶、『逆櫓』の樋口、『熊

谷陣屋』の熊谷と、思ってもみなかった役に臆せず挑めるようになりました。ぼくはだいたい戦国時代とか、お城を見て歩くとかが好きで、男と男が肚を割って対決するような芝居が好き。恋愛物や心中の芝居にはあんまり興味がありません。実人生では女性嫌いじゃないですけど（笑）

しかし平成十七年八月歌舞伎座の『金閣寺』の松永大膳は、国崩しと言われる巨悪でありながら、絵でも、女でも、美しいものをこよなく愛する非常に色気のある人物で、三津五郎さんは立派に演じた。

「ああ、あの役は役者なら誰でもやってみたいと思う役でしょうね。日本一美しい金閣寺にたてこもって、雪姫に墨絵の龍を描けと命じたり、自分の意に添わないと、さっさと強姦もできるのに（笑）、桜の木に縛りつけてその風情を楽しむ。サディズムの極致というのも魅力的だなあ。役者冥利につきる面白い役ですね」

この大役を成功させた上で、今後もスケールの大きい『千本桜』の知盛や『忠臣蔵』の由良之助にも挑んで行きたい、という。

さて、三津五郎さんがいつか「三十年前に生まれたかった」と言っていたのを思い出し、最後に伺ってみることにした。

「だって昔は芸ごとに対する尊敬というものがもつとあったでしょう。踊りであれ長唄であれ、月謝というのは芸を授けていただいたことへの感謝の表われですよ。単なる報酬じゃない。ぼくは明治生まれのお師匠さん方にいろいろ教わりましたから、まだそういう気運がありました。どこかに芸の神様がいらして、ちゃんと見られているんだという襟を正したいような厳肅な感じが、芸ごとの世界だけでなく世の全体に、もつとあったらいいなと思うんです」

三津五郎さんの真摯でピンと張りつめたような芸風に一脈通じる話だと思う。

（この項おわり）

たとえば嬰兒ようにの母を離れざるがごとし。

（聖光上人『徹選択集』巻下）

（お念仏とは、阿弥陀さまから決して離れないということであり、いついかなる時も阿弥陀さまにお会いしているということです。）あたかもそれは、母親が乳飲み子から決して離れないようなものです。

母と子の絆——たとえば嬰兒の母を離れざるがごとし——

わが子を思う母のぬくもりとやさしさが手にとるように伝わってくる「おかあさん」という素敵な詩に出会いました。

「おかあさん」

青森県八戸市立美保野小学校二年・西山拓海

おかあさんは／どこでもふわふわ

ほっぺは　ぶによぶによ／ふくらはぎは　ぽよぽよ／ふとももは　ぽよん／

うでは　もちもち／おなかは　小人さんが／トランポリンをしたら／

とおくへとんでいくくらい／はずんでいる

おかあさんは／とってもやわらかい／ほくがさわったら／

あたたかい　気もちいい／ベッドになつてくれる

この詩は「荒城の月」で知られる土井晩翠の生誕地・仙台市主催のコンテスト「晩翠わかば賞（第四八回）」で佳作を受賞したそうです。私のような詩心の乏しい者が読んでも、自然と引き込まれてしまいます。学校関係者の話によると、拓海君は詩や作文を書くのが得意だったそうです。ところで、なぜ私がこの詩を知ったかという、去る四月二日、拓海君の母親（西山未紀容疑者）が青森県警によって拓海君殺害容疑で逮捕され、翌三日付けの新聞各紙に母親の逮捕と共に、この詩が紹介されていたからです。報道によれば、西山容疑者

は一日午前九時頃、同居する両親の外出中、自宅で寝ていた拓海君の首を電気コードで絞めて殺害しました。関係者の話などから、精神的に追い詰められて心中を図ろうとしたのではないかと、とも伝えられています。

言うまでもなく、ここに紹介した詩の「おかあさん」が西山容疑者です。拓海君が小学三年生の時に行われたこの作文の授賞式からわずか半年足らずの悲劇だったそうです。西山容疑者は、どんな思いでわが子の首に電気コードを巻きつけたのでしょうか。もちろん、こうした凶行が許されるはずありませんし、わが子を殺害した事実を決して消えはしません。西山容疑者には厳正な裁きが待ち受けていることでしょう。ただ、この詩を読んだ私には、殺された拓海君が「僕はまだまだ生きていたかったのに、どうしてこんな酷いことをしたの?とても苦しかったよ、辛かったよ!」と「おかあさん」を厳しく責め立てながらも、その一方で「とってもやわらかい、あたたかい、気持ちいいベッド」のような「おかあさん」のことを大好きでたまらない拓海君の「おかあさん」への思慕が、まったく無くなってしまうとは思えないのです。そして、われに返った西山容疑者もまた「ごめんなさい、ごめんなさい」とわが子を殺めてしまったことを終世懺悔し続けるのではないかと思われてならないのです。この

「おかあさん」という短い詩の一節から、それほどまでに強い母と子の絆を読みとってしまうのは私の行き過ぎでありましょうか。

同じ頃、やはり母と子の強い絆を感じさせる、こんな詩も目にしました。

「さびしくなったら」

宇都宮市・柴田トヨ（九十六歳）

さびしくなった時／戸の隙間から／入る陽射しを／手にすくって／

何度も顔に／あててみるの／そのぬくもりは／母のぬくもり

おっかさん／がんばるからね／眩きながら／私は立ちあがる

〔朝の詩〕産経新聞、二〇〇八年二月四日

「陽射し」のようにあたたかく、わが子を包む「母のぬくもり」は、九十六歳になられた柴田さんにとっても忘れ難いものであり続けているのでしょう。

冒頭のご法語は、浄土宗の第二祖聖光上人のお言葉です。上人は、「南無阿弥陀仏」という呼びかけを聞かれた阿弥陀さまは、あたかも乳飲み子のことを片時も離れずに見守り続ける母親のように、お念仏を称える者をあたたく包み込み、常にやさしく見守ってくださるとお示しです。聖光上人もまた、忘れ難いご自身のお母上のぬくもりを思い出し、お浄土での俱会一処の喜びを脳裏に描きつつ、このご法語をお遺し下さったのでありましょう。

合掌（林田康順）

第十八回

江戸を歩く

増上寺から江戸城へ

森 清鑑

大江戸ウォーカー

増上寺門前町

増上寺芝大門を出ると、道沿い左側は芝神明飯倉神明宮と神明門前町、七軒町。右側は、増上寺片門前町と中門前町。二角を過ぎると、東海道にぶつかる。この門前町は、街道沿いに南の金杉橋まで続く。増上寺門前町に貧乏長屋があった。ここに転がり込んできた、二十五、六の若者。朝から晩まで書物を読んでいる。この若者から豆腐一丁の注文があったので七兵衛さんが届けに行くと、金がない。これが三日続いた。七兵衛さん、事情を聞くと、「学者になって、世の中を少しでも良くしたい」と云う。しかし、極貧生活。七兵衛さん感心した。出世払いで良いからと、それから差し入れが始まった。おから、豆腐の売れ残り、三日に一度はお握り。女房の心尽くしのおつけもの。若者、感謝にむせびながら食した。いつしか、この貧乏長屋では、この若者を「おからの先生」と呼ぶようになった。ところが、ある時、七兵衛さん風邪をこじら

せ寝込んでしまった。ようやく治って早速、長屋におからを届けると、この若者がいない。行き先も分からない。なんて名前か長屋のものに聞くと、「確か、お灸がづらい」とかいつていました。これでは分からない。次第に疎遠になり、いつしか忘れてしまった。

元禄十五年十二月十四日、赤穂浪士の吉良邸討ち入り。その翌日、七兵衛さんの近くから火が出て、廻り一帯が焼けてしまった。大工の政五郎が火事場見舞いに行くと、すっかり焼けている。聞くと、七兵衛さん、着の身着のまま焼け出され、三田魚籃坂下の薪屋さんの処に避難しているという。早速駆けつけると、「ある人から頼まれて十兩の金を持参したので受け取って欲しい」と政五郎。しかし、「ありがたい話だが、素性の分からない金に手をつけるわけにはいかない」と固辞する七兵衛さん。結局、薪屋さんとも相談し、神棚に上げ、困ったときに使うことにした。あくる十六年二月四日、赤穂浪士切腹。江戸の巷では、「誰だい、切腹など決めやがった

のは」と大騒ぎ。それからちよつと経つて、政五郎が再び訪ねてきて七兵衛さんを増上寺門前の焼け跡に案内する。すると、新築の店が建っている。とそこへ現れたのが「おから先生」。「あのときは本当にお世話になりました。これでは体がもたないと友人達に連れ出されまして、ご挨拶もできずに大変失礼しました。増上寺の了也僧正にお世話になり、僧正の口利きで大老柳沢吉保さまのお引き立てを戴きまして仕官ができませんでした。火事で焼け出されたことを知り、すぐにお見舞いをお送りしましたが、赤穂の討ち入りがあり、腹を召されましたのでようやくお詫びかたがお目にかかることができました。十両の金も店もおから先生が感謝の印に提供したものでした。そこで七兵衛さん、本当の名前を聞くと、荻生徂徠おぎうそらいだという。あー、それです。お灸がつかない」といったのか。「義士の切腹を言い出した学者が荻生徂徠。すると、お前さんかい」と七兵衛。「それなら、十両もこの家も要らない」。「家臣一同仇討ちの一心は当然

のこと。しかし、徒党を組んでの仇討ちは天下の大法を犯すもの。ですから私は法を曲げずに、情けを注いだのです」。「そんなの学者の理屈だよ」と七兵衛。「いえ、これは武士の本分に通じることなのです。切腹は武士の誇り、誉れなのです。散り際を如何に潔くするか武士というものは生涯の全てを懸けているといつても過言ではないのです。切腹の様子を檢視役の方々から聞きましたが、赤穂の皆様は皆一様に清々しいお顔で、御主君の側に馳せ参じる喜びを現しておられたとのこと。法を曲げずに情けを注いだというのは、七兵衛さん、十年前あなたが私になさってくださったことです。私は最初金を払う素振りで三丁の豆腐を食しました。法に触れた行いです。しかし、あなたは出世払いで良いと情けをくださった。天下の法に許す限りの情けを注いで下さったのです。そのお陰で私はなんとか世に出ることができました。十年前、七兵衛さんにいわれました。腹を減らしてここで死んではならぬと。どうせ死ぬなら、世

に出て見事に花を咲かせてから死ねと」。七兵衛さん。焼け出されたときには、焼き豆腐だった、今、先生の話を聞いているうちに、泣き豆腐になっちゃった。

「武士に意地があるのなら、情けもあるはず。ご主君のそばへ送ってやるのも情けですね。先生」。「わかっていただけ、私も嬉しいです。ですから、十両もお店もお受け取り下さい」。但徠は、増上寺の了也僧正に七兵衛さんの話をした。すると、「寺でもその豆腐にあやかりたいものじゃ、ということでした。いかがですか。増上寺へのお出入りは」。七兵衛さん、早速、納めることにした。この豆腐を「徠豆腐」と名付けた。「この豆腐を泉岳寺の四十七士にもお供えます。それにしても切腹した赤穂浪士も立派だが、先生もてえしたもんですね」。「いや私は豆腐好きのただの学者ですよ」。下げは、「いや、そんなことはねえ。先生はあつしのために自腹を切って下さった」。(三遊亭円窓「徠豆腐」より) 大学者、荻生徠徠の若き日の話である。

芝大門を出て、東海道を北に歩く。浜松町、神明町、宇田川町が街道の両側にへばりついている。その先の左側はずっと日蔭町で、右側は柴井町、露月町、源助町、芝口町と続く。つまり、街道を挟んで左右に細長く町人の町が存在し、その東西は武家屋敷が囲んでいる。この設計は、都市計画造りとして見事である。千六百年代に造られた、江戸の町並みは、ヨーロッパ、ローマなどの設計とおなじである。街道、日蔭町の西に面して、お目付遠山金四郎の居屋敷（幕臣の本邸、九百三十二坪）が見える。道の右側は露月町で、その東は、会津藩松平容保の中屋敷（二万九千坪）。そして汐留川を挟んで海に浮かぶように浜御殿がある。街道を北に今少し歩くと右側は、源助町から、芝口一―三丁目である。これから先の東西は、大名上屋敷がずらりと並ぶ。増上寺北側から街道に沿ってお城に登る、愛宕下大名小路も、東海道からは非常に近い。浅野内匠頭が切腹した田村右京大夫の屋敷も日蔭町添いの遠山金四郎屋敷角を左に曲がり堀に

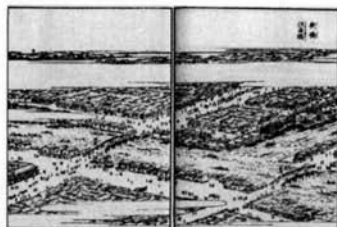
沿ってちょっと行けば、正面にある。東海道
芝口一丁目を過ぎると、芝口橋（新橋）が見
える。この橋は、虎御門、幸橋御門を経て流
れる外堀を渡っている。増上寺南側を流れる
新堀川（金杉川、古川）に架かる金杉橋から、
この芝口橋までが家康が最初に東海道として
整備した道である。芝口橋（新橋）の東には
汐留橋が見える。東海道、芝口橋（新橋）か
ら京橋まで。これが今日の銀座を含む、江戸
の町並みの礎になっている。京橋まで左右に
膨らんだ、主に職人町が展開する。

埋め立て、町人の町

家康が江戸に来たときには、粗末に残る江
戸城までが海で、波が押し寄せる、砂浜であ
った。日比谷入り江とは、南北は芝から大手
町に及ぶ細長い湾で、西は太田道灌が造った
江戸城をなめ、東は江戸前島（現在の神田、
日本橋、銀座、新橋にいたる海に突き出た半
島）の間を縫っていた。したがって、今の皇
居と東京駅の間に日比谷入り江の先端部分が

入り込んでいたのである。彼は、城には見向
きもせず、この湾の埋め立て工事と運河の建
設に着手した。当時の様子はこう表現されて
いる。「江戸城は海岸の波打ち際にあり、い
たるところに葦がおい茂る湿地であり、城下
町を割り付ける場所は十町ほどもあるかなし
かの狭さだった」（落穂集追加）。徳川の江戸
建設は、天正八年（一五八〇）から万治三年
（一六六〇）の第五次計画まで、約八十年を
かけて行われた。こうして堀や水路に巡らさ
れた町人町や武家屋敷ができたのである。

新橋から京橋までの町の様子を概観してみ
よう。まず、この地形は、ベニスの運河と同
じで、有力大名上屋敷の東を北上する外堀
（数寄屋橋から呉服橋）、虎御門から西東に流
れる堀、汐留から北に上る三十間堀、その行
き着く先の、北側を東西に流れる京橋川に囲
まれた町人町ということである。この町を突
つ切る東海道（中央通り）は、芝口橋（新橋）
を渡ると、北へ順に出雲町（銀座八丁目）、
竹川町、尾張町（松坂屋）、新両替町四丁目



◆「江戸名所図会」左東海道、芝口橋（新橋）、渡ると銀座
の町並み。右汐留橋。この橋の左を北上するのが三十間堀。

(銀座四丁目) から二丁目、そして京橋に出る。竹川町は、竹屋、瀬戸物、尾張町は、雛人形と呉服の老舗、新両替町四丁目西の鑓屋町は、御用鑓師の拝領地。新両替町は、慶長十七年(一六一二)、銀貨幣の役所が置かれたところ。一丁目、二丁目(銀座二丁目)の街道を挟んだ左右には、銀貨幣の鑄造所、それに携わる役宅、両替屋が配置された。そんなわけで江戸の人々は、新両替町を、銀座町と呼んでいた。関わる役人は、いずれも世襲制で江戸期を繋ぎ、管理の長は大黒屋であった。この大黒屋八代ときに不正事件が起こり、銀座は日本橋蛸殻町に移転。明治二年、新両替町は、正式に銀座の地名となった。

三十間堀

芝口橋(新橋)から右に行くと汐留橋でここから京橋川に向かって北上していた堀が三十間堀である。建設当時、幅三十間(五十四メートル)あったという。文政十一年に堀幅は十九間(三十四メートル)に狭められたが、

江戸の舟入り運河として掘削され、当初の三十間堀が通称となった。この堀に架かっている橋は、北に向かつて木挽橋、三原橋、紀伊国橋、そこで右に迂回すると、真福寺橋。そして京橋川に出る。そこには、真福寺橋、白魚橋、弾正橋と三つの橋が架かっている。そこで処の人は、ここを三ッ橋と呼んだ。右へ行けば八丁堀。白魚橋を西に行くと、京橋をくぐり抜け、外堀の比丘尼橋。弾正橋をくぐって北に舟を運べば江戸橋に出る。三十間堀の東側に細長く形成された町が木挽町である。堀の西側は三十間堀町。堀は東海道と並んで北上する。その位置は、現在の昭和通り三原橋交差点(歌舞伎座)から銀座寄りに一步入ったところで、ここに三原橋が架かっていた(映画館シネパトス)。昭和二十三年、戦争で瓦礫の山と化した、灰燼を処理するため、埋め立てが始まり、三十間堀は、消滅。ビル街となり、現在では見る縁もない。

外堀と三十間堀の間の、銀座を含む職人町に住む人々にとって、三十間堀に沿って海側

◆京橋南築地鉄砲州絵図 新橋から京橋に抜ける東海道とそ
の右、京橋川に注ぐ三十間堀



◆家康入国当時の江戸地形



◆「江戸名所図会」上巻 尾張町の賑わい



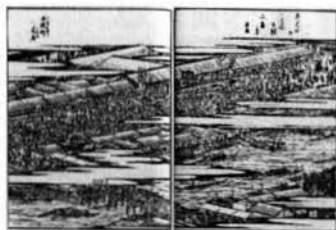
に細長く形成された、木挽町一丁目〜七丁目は、「川向こう」と呼んでいた。芝居も盛んで、木挽橋から南の木挽町五丁目（銀座六、十四、銀座東武ホテル）には、森田座、そのまた南の六丁目（銀座七、十三、社会保険事務所など）には、山村座があった。こここそ絵島生島事件（一七一四）の舞台となったところである（大奥御年寄、絵島は、名代として六代家宣の墓参を増上寺で済ませた後、山村座で芝居見物。その後、名優生島と芝居茶屋で過ごす。しかし、大奥に帰る門限に遅れた。ここから、大奥の風紀肅正という名目で、裏の権力闘争が起こり、絵島は高遠藩お預け、兄は切腹。生島は遠島。計千五百余名が罰せられた。この事件で山村座は廃絶となった）。木挽町は多くの芝居小屋、芝居茶屋、料理茶屋で賑わった処である。

町奉行所

新両替町四丁目の角を西に曲がれば元数寄

屋町で、有楽原広小路。数寄屋橋がお堀に架かり、橋を渡ると数寄屋橋御門、大番所。その後ろに南町奉行所（マリオンの後ろから有楽町駅、交通会館前の一帯）があった。「君の名は」で有名な数寄屋橋は、昭和三十三年、高速道路建設まで存在し、橋から堀に浮かぶ舟が一杯見えた。橋を渡り、数寄屋橋御門（枳形門）を抜けると大番所と広場（マリオン）。その背後に二千七百坪の奉行所。これに対し、北町奉行所は、堀を北上し、鍛冶橋御門を経て、呉服橋御門の処にあった（東京駅八重洲側右、鉄鋼ビル背後）。これらは単に位置関係だけであって、管轄区域とは無関係である。

町奉行は、いうまでもなく寺社奉行、勘定奉行と並ぶ、三奉行の一つだが、現代でいえば、東京都知事、警視総監、東京高検・高裁を兼ね、しかも国政にも参加する、幅広い行政の要職。それだけに優秀な旗本が選ばれたが、大変な激職で健康を損ね、在任中のまま



◆「江戸名所図会」大鵬わいの木挽町芝居。手前、舟が行き交う三十間堀。

死亡する率も高かった。そうした状況下で大岡越前守忠相は、享保二年（一七一七）から元文元年（一七三六）の約二十年、この激務をこなした。写本や講談でお馴染みの「大岡政談」に代表される数々の名裁きは架空のものとしても、吉宗の享保の改革を支える、行政官としての立派な業績には恐れ入る。町政改革、町火消組合の創設、この組織を「いろは四十七組（のち四十八組）」に再編、防火建築の奨励、火除地の設定、貧病人のための小石川養生所の設置、青木昆陽を任命し、飢饉対策としてサツマイモ栽培の助成、米会所の設置、米公定価格の徹底指導、物価対策では株仲間の公認など組合政策を推進、貨幣政策では流通量の拡大を進言。農政では、武蔵野新田の開発、酒匂川普請。これらは寺社奉行になるまでの、町奉行時代の業績である。吉宗の命とはいえ、公正真摯、庶民のための政治。それが理想的な行政官として「大岡政談」に繋がっていったのではなからうか。

落語に「三方一両損」がある。ある左官屋さんが道で財布を拾った。中身を見ると、書き付け、印形、それに現金三両。律儀な左官屋さんは、早速、落とし主を訪ねた。これもまた律儀な大工でお礼を言い、書き付け、印形は戴くが、三両はもう自分の手を放れたものだからと受け取らない。左官屋さんも金のために届けたのではないと律儀者同士が喧嘩。大岡の仲裁は、自ら一両を出して、四両を二人で二両ずつ分ける。そうすればそれぞれ一両の損だが、三方が収まる。無事解決。この後、二人に感心した大岡は膳を出す。落ちちは、「空腹だからといって、急にたんと食するなよ」。「へえ、多かあ（大岡）食わねえ。たった一膳（越前）」。

【参考文献】

「江戸名所図会」角川書店

「広重の大江戸名所百景散歩」人文社

「東京の地理がわかる事典」鈴木理生著、日本実業出版社

「江戸切絵図を読む」相田浩一著、東京堂出版

「江戸明治東京重ね地図」監修：吉原健一郎など。発行所：（株）エービーピーカンパニー

【訂正】

「浄土」二〇〇八年六月号、二十八頁上段左から五行目の「大久保とて例外ではない。」は、「西郷とて例外ではない。」の誤り。

ご葬儀の弔辞などでは、

「どうぞ安らかに眠りください」と、結びに述べて弔意を表す人が少なくない。

ところが、極楽浄土に往生した人には眠っている暇などはない。

還相げんそう回向えこうの教えによれば、往生したな

らば、早くこの世に戻って、苦しんでいる人達を救い守ってあげねばならない。そして最後には、その人達を極楽浄土に迎えてあげねばならない。

という重大な使命を阿弥陀様から頂いているのである。

極楽で安らかに眠っている暇などはないのだ。

そのために夜も昼も休む暇もなく私たちのために働いておられるのである。

翻って、この世に残った私たちは、お

浄土へさきに行った懐かしい人達に、あの時の別れは悲しかったけれども、今は親しく守ってもらっているのである。

亡くなったあのひとと、二人の絆はブツツリと切れてしまった、と思ったら大きな間違いだ。

目には見えないが、四六時中、私の側に居て、事故なども起こさぬように守り、また心が落ち沈まないように「私がついているよ」と励まして下さっていることを忘れてはならない。

だから亡き方との絆は、生前以上に固く結ばれているとも言えるのである。

かくして亡き方への感謝の心が、回向合掌の姿となって表れる。

ここまで筆をすすめてきたら、さる人が臉に浮かび、お念仏が溢れ出てきた。

法然上人
とその
時代

シリーズ第五章

壇ノ浦

第一回

作

石丸晶子

画

アーサ



一

源氏の攻撃は海からで、よもや陸から攻めてくることはない、と予想していた平家は虚を突かれ、屋島を捨てて海上に逃げ去った。

今は海上をただよう者となったこの平家と源氏が、遠からず雌雄を決しなければならぬことは、誰の目にも明らかであった。

いうまでもなく、雌雄を決するその戦は船戦になる。

当時、西国には熊野水軍、伊予水軍、阿波水軍、長府水軍、豊後水軍、肥前松浦水軍などなど、各地の豪族が擁する大小の水軍多数が散在していたが、それぞれの水軍は大小数百から千を越える船を擁して、一つの船団を形成していた。ここに水軍とはいいが、平時は海に出没して、付近を航行する船を襲う海賊たちである。

平家は清盛の時代から西国に根を張っていた。したがって、河野通信率（うののむらたのぶ）いる伊予水軍は、

初めから源氏方の旗をにかけていたが、あとの水軍はみな平家に就いていた。

これら平家方水軍をどれだけ切り崩して源氏方にできるか。迫り来る次の合戦に向けて、義経の攻略はこの一手に懸かっていた。

月が替わって三月。

「武蔵坊よ」

と、弁慶をはじめ佐藤忠信、伊勢の三郎を伴い、屋島の浦から船を漕ぎ出させた義経は、隣で瀬戸の島々に視線を向けている弁慶に呼びかけた。

「快い朝だ。気がつくとすでに彼岸も過ぎておるな」

「まことに。海も風いでおります。なれど、この島々の西には平家の者どもが陣取っているのを思いますと、この景色も心穏やかには眺められませぬ」

「おお、それよ」

と義経は、

「わぬしの父親は熊野の別当湛増（たんぞう）と聞いてお

時代小説の文芸的表現



時代小説の文芸的表現

時代小説の文芸的表現

るが、未だ水軍を率いてわれらに参じておらぬのはなぜだ」

湛増は保元の乱が勃発した時清盛を助け、その功績によって、以来清盛の信頼を勝ちえてきた熊野水軍の長であった。源三位頼政が打倒平家に立ちあがったときには、頼政の下で種々画策する源行家の行動を、いち早く清盛に報せるなど、平家に心を寄せてきた豪族であった。

しかし、弁慶は早くからこの父の許を出奔し、幼少時から比叡山に登って、この年月、父との行き来は持っていない。

「申し訳ございませぬ。長年、父は平家に心を寄せて参りましたなれば、未だ迷うところがあるやに思いまする」

「時の運はわれらにある。平家に味方して何とするぞ」義経は弁慶を振り返るとそう言った。

「父には先ごろも文を遣わし、この度の合戦に源氏が勝つは必定。必ず必ず、九郎殿に御

加勢申すよう申し遣りましたが」そう言う弁慶の髪を海風が乱していく。

義経も頬に風をうけながら、

「湛増の水軍は何艘ほどあるうな」

「二百余でございましょう。日ごろ熊野の荒海をわが庭のごとく心得、荒れまわっておる者どもにございます」

「頼もしいことよ。何としても湛増を説得してもらわねばならぬ」

「心得ております。父はまた瀬戸内の海賊共とも行き来がありますれば、熊野水軍を率いて父が参じましたならば、おのずと瀬戸内の海賊どももわれらに馳せ参じてまいりましょう」

「ふむ。今は風いでおるこの海を、われらは平家の者どもの血で必ずや赤く染めて見せようぞ」

濃い眉をキッと引き締め、義経は弁慶をかえりみた。

それから十日あまり後のことである。

「吉報、吉報にごさる。只今、沖に数百の船団が現れ、先乗りの小船が浜に到着して申しますには、船団は三十余艘にて伊予の河野通信が手の者ども。船団には千余騎の兵が乗っております由」

佐藤忠信がそういつて義経の許に駆け込んできた。

義経は床几しよぎから思わず立ち上がると、

「めでたい。まことに吉報だ」と大声で言った。

昨日は熊野の湛増からも文が届き、「次の合戦には熊野水軍挙げて源氏にお味方いたすことに決定けつじやう申したれば、準備を急ぎ、近日中にも、われらが船団あげて熊野から屋島に向かう算段」と言ってきた。

実は湛増、息子弁慶の書状を見ても、すぐには決心がつかねた。何といつても平家のは

余光はそこに残っている。ここで一族のかじ取りを間違えば、一族滅亡は必定。湛増は迷った。

考えに余り、彼は熊野権現に神楽かぐらをあげた。白旗（源氏）に就け、との託宣であつた。しかしそれでも心決まらず、彼は権現の前でさらに赤と白との鶏に七番闘わせた。みな赤の負けであつた。

そこで遂に、湛増は平家から源氏に付くことを決意したのである。

「昨日の湛増たんぞうに続いて、今日は通信みちのぶぞ。まことに吉報だ」

義経は重ねて言った。

「さらに通信は、今回はとりあえず三十余艘なれど、合戦となれば二百余艘に三千余騎を調達して、源氏にご加勢かぜ仕ると言い寄越よこしました」

荒く息をしながら忠信は続けた。

「湛増の船二百余、通信の船二百余か。景時（梶原）の奴もどこで調達したのやら船団百

四十艘を率いてこの浦近くに停泊させておつたな」

と義経は続けて、

「合わせて五百四十。この合戦に生き延びんとする者は、みな、われら源氏に就かねばならぬ」

傍らに控えていた弁慶は義経に、

「熊野、伊予の水軍が源氏に就いたとなれば、西国の海賊ども、今後は次々とわれらに下つて参りましょうぞ」

大きく頷きながら義経は、

「しかしそのことよ。水軍、豪族どもを、一人たりとも多く味方につけねばならぬが、合戦の場となるは壇ノ浦。あの浦は潮の流れが激しく入り組みおつて、なまじ西国の水軍といえども、あの瀬戸を漕ぎこなすのは至難のことと聞く」

「御大将の命により、すでに先の月、周防の国の船奉行五郎正利に、われら源氏に味方するよう、この弁慶自身、再三出向いて頼みお

きました」

「返事はまだ来ておらぬのであろう。正利を味方につけるこそ、肝要ぞ」

瀬戸内の西の海域を取り仕切る周防国の官人船奉行の正利は、壇ノ浦周辺のはげしい潮流を熟知している海賊衆をその支配下に置いてゐる男であつた。

「心得ております」

弁慶はそういうと、

「まだではございますが、返答する約束の期日までにはあと十日あります。いまだ時間がある上、熊野と伊予が源氏に下つたと聞けば、正利も考えましょう」

三

十日が経った。

明日三月二十三日早晩にはいよいよ船揃いをして壇ノ浦へ向かう予定である。

が、正利はまだ返事して来ていなかった。じりじりと義経たちが正利の返事を待っている

この十日の間までに、範頼のりよりの軍に従って九州豊後にあった三浦義澄よしずみが、大船十艘を率いて義経の許にやってきていた。

義澄たちは豊後からこの屋島の浦に来るまで、赤間あかま、門司、壇ノ浦、の潮の流れを見てきたという。

「さすればその方ほう、船を壇ノ浦に乘せて屋島に来たのか」

義経は急き込んで訊ねた。

「いえ、壇ノ浦を遠くから見ただけで」と義澄は、

「しかし眺めただけでも、潮流が西から東へ、東から西へと、一日に二度、渦を巻きつつ激しく変わるさまは見てとれました」

「流れの速さは如何ほどか」

「早馬が駆けるほどでありましょうや。その潮流が渦を巻きつつ東、西へと流れ下るさまは恐ろしいばかりでございました」

と、その時、

「只今、五郎正利、大船二十艘を率いてまい

りました」

と忠信が正利を伴って駆け込んで来た。

「お、来たか」

義経は大声で言った。「待たせたぞ、正利。

約束の期限ぎりぎりだ」

「お味方いたします上は、出来うる限りの用意をいたそうと思ひまして」息を大きく弾ませながら正利は答えた。

「用意は整ったのだな」

「はい。壇ノ浦の入り組んだ潮の流れは、長年そこを知る者でなければ、とても船を操れるものではありません。瀬戸内の如何な海賊といえども、あの浦を漕ぎ渡ることはできません。で、この五郎正利、大船の他に櫓崎船くしきせんを何としても引き連れたく、それに思わぬ手間を要しました」

「櫓崎船とは」

「長門の国の西のはずれ、赤間が関の入り口を占めておりますのは、長府櫓崎ちやうふくしきの郷ごうにいる海賊どもでございますが、あの者どもは赤間、

壇ノ浦海域の潮の流れに慣れ親しみ、わが庭のごとく心得ております。櫛崎船という船足速い小船を我が意のままに操ります」

「よくぞ手配したぞ、正利」

「平家の知盛方とももりがたもこの海域を知っておりますれば、櫛崎の海賊衆に目をつけているに違いありません。されどこの五郎が引き連れられた十二艘三十人の海賊どもは、櫛崎の中でも選りすぐりの船頭にございます」

「でかした、でかした、正利。勝利は目前。よし、明日は船揃いしていつせいに壇ノ浦目がけて出航いたす。義経、明日はその櫛崎船に乗って先頭に立とうぞ」

「おおっ」

義経の檄げきに答え、側に控える侍たちは平家が結集している壇ノ浦の海に向かって、一斉にこぶしを振り上げた。

(つづく)

古き伝統技
三代にわたる信頼

有限
会社

浄土宗法衣専門
古島法衣店

〒111 東京都台東区元浅草4の2の1
電話(03)3842-1289
振替00180-2145231

暑中お見舞申しあげます

浄土門主
総本山知恩院門跡第八十七世
坪井俊映

大本山増上寺
法主
成田有恒

大本山 百萬遍知恩寺
法主
服部法丸

〒606-8225 京都市左京区田中門前町一〇三

大本山金戒光明寺
法主

高橋弘次

大本山清浄華院

法主 **伊藤唯眞**
執事長 **吉川文雄**

大本山善導寺
法主

阿川文正

大本山光明寺
法主

宮林昭彦

鎌倉市材木座六・十七・十九

暑中お見舞申しあげます

浄土宗事務総長

稲岡 康純

浄土宗大願寺住職

神谷 英敏

法然上人御誕生地

美作

誕生寺

〒709・3602 岡山県久米郡南町里方八〇八
TEL 〇八六七 (二八) 一一〇二
FAX 〇八六七 (二八) 一一六二

〒154・0017 世田谷区世田谷四・七・九

大吉寺

住職 成田昌憲

函館

称名寺

〒040・0055 函館市船見町十八・十四
電話 〇一三八 (二三) 〇五七四

清水湊

忠高山
實相寺

〒420・0839 静岡市葵区鷹匠

二丁目二四番十八号

玉桂山
華陽院

電話 〇五四 (二五二) 三六七三
FAX 〇五四 (二五二) 三六五六

暑中お見舞申しあげます

学大乘淑徳学園理事長
淑徳大学学長

長谷川匡俊

〒174 865 東京都板橋区前野町五・五・二

学校法人 淑徳学園

理事長 麻生諦善

淑徳SC中等部・高等部
校長

川添 崇

塩竈市
雲上寺

東海林 良雲

本應寺

熊谷靖彦

〒844 141 嬉野市塩田津中町

水谷幸正

〒612 844 京都市伏見区
羽東師鴨川町三五六

弘経寺住職

金田進徳

〒302 0023 茨城県取手市白山二・九・二八

吞龍上人祈願所

川越・古郡高札行中

蓮馨寺

糸原恒久

〒350 006 川越市連雀町七・一
電話〇四九(二二二)〇〇四三
FAX〇四九(二二六)〇六七六

養蓮寺

田中光成

〒194 0032 町田市本町田三六五四

赤坂六地藏尊

浄土寺

〒107 0052 東京都港区赤坂四・三・五
電話〇三(三五八三)三六三〇

暑中お見舞申しあげます

明福寺

福井豊信

〒132-0013 江戸川区江戸川三・八・一

宗源寺

齋藤价洲

〒110-0015 台東区東上野五・一・六

白本尊阿弥陀如来

静岡
宝台院

住職 野上智徳

愚鈍院 こつぶがや文庫主

中村眞道
中村瑞貴

〒984-0061 仙台市若林区新寺三・一二・一七
電話〇三二(二五六)六〇五七

勝願寺

〒365-0008 埼玉県鴻巣市本町八・二・三一
電話〇四八(五四一)〇二二七

貞松院住職

山田和雄

〒392-0004 諏訪市諏訪二・一六・二二
電話〇二六六(五二二)一九七〇
FAX〇二六六(五二二)三四四六

鶏頭山安楽寺

飯田實雄

〒399-4115 駒ヶ根市上穂栄町九・五
電話〇二六五(八三三)一三三六〇

骨仏の寺

一心寺

〒543-0062 大阪市天王寺区逢阪二・八・六九
電話〇六(六七七)〇四四四

〒112-0002 東京都文京区
小石川三丁目十四番六号

無量山
傳通院

電話〇三(三八一四)三七〇一(代表)

暑中お見舞申しあげます

極楽山 西方寺

定じやう義ぎ如来

〒989-3213 仙台市青葉区大倉字土下
電話 〇一一(三九九)一一〇一一
HomePage: <http://www.johgfor.jp/>
E-mail: saihujie@johgfor.jp

花巻 廣隆寺

谷地玄雅

九品阿彌陀如来

淨眞寺

〒158-0083 世田谷区奥沢七・四一・三
住職 清水英碩

願行寺住職

佐藤成順

〒140-0004 品川区南品川二・一・一一

梅窓院
住職

中島真成

東京都港区南青山
2-26-38
電話 03 (3404) 8447
ホームページ
<http://www.baisouin.or.jp>

鎌倉大仏殿

高德院

〒248-0016 鎌倉市長谷四・二・二八
電話 〇四六七(二二)〇七〇三
FAX 〇四六七(二二)五〇五一

天光院 老納

真野龍海

<http://www.evam.ne.jp/tenkoin/>
ryumano@nifty.com

光円寺住職

佐藤良純

〒112-0002 文京区小石川四・一二・八

光取寺

大室了皓

〒141-0021 品川区上大崎一・五・一〇
電話 〇三(三四四)八三八四



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウォッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会

●根

〔特選〕大根漬け重石に使う鉄アレー

浜口 佳春

大根は便利な材料で、そのままでも干してもよいが、代表的なものといえばたくあん漬けだろう。家庭には漬けもの石があったものだが、代用するのが鉄アレーというから面白い。誰が使っていたものだろう。

〔佳作〕重畳の走り根鞍馬の奥茂る

中島富士子

秋の日を浴びガジュマルの根の太き

金谷 友江

垣根越え滝の如くに白き藤

黄瀬 鴻

●津

〔特選〕五稜郭桜津軽を渡りけり

山田 至

榎本武揚ら幕軍が、官軍に最後の抵抗をした五稜郭である。ここに来てはからずも花見ができたのだ。はるばる津軽海峡を渡つてき

た桜前線が、ようやくここに至ったのだという
思いを深くしているのである。

〔佳作〕 谷中根津紫陽花の寺歩きかな

柏木 貞華

船津とう地名の名残り夏に入る

増田 信子

新緑や川津へ着きし筏舟

増田 尚人

●自由題

〔特選〕

植木市蝶追いしまま帰らぬ子

石原

新

植木を見て回るといふのは、連れられてき
た子供には退屈だ。そういう時、あたりを舞
つている蝶を見つけた。早速追いかけていく
と、どんどん遠くへ行ってしまう。帰り道は
覚えていふのだろうか。

〔佳作〕 みどり子の産毛匂える晩夏光

河合富美枝

甘夏の皮むく父の太き指

三宅 月犬

菩提寺の畳を歩く山の蟻

山口 信子

読者の声

昨年40年つとめあげた会社を退職し、妻と二人きりの生活がはじまりました。それぞれ独立した子供たちと時々連絡をとりあひながら、日々神社仏閣を巡っております。四月は桜、五月はつつじ、この間は鎌倉へ紫陽花を見に行つて参りました。

「江戸を歩く」は毎月楽しみに読んでおります。そこでお願ひなのですがたとえば薔薇を丹精されておられるお寺とか、秋の紅葉が美しいお寺とか教えていただけると嬉しいのですが……今年の夏は鎌倉の光明寺さまの蓮の花を見に行きたいと思っております。

「誌上句会」を読んで季節感のとりえ方などを妻とふたり学んでおります。

(練馬区 62歳)

マンガ「さっちゃん」はネットに登場するおばあちゃんが好きです。気持ち若くて、体力があつて、ユーモア好きのおばあちゃん。ああいう風に輪をとっていただければいいですよ。孫とのつき合い方を考えているおばあちゃん候補生です。

(青森 書店経営)

内臓を少し悪くして入院生活を余儀なくしております。毎月十一日、お墓参りにお寺へ行く娘がいただいてくる「浄土」がとても楽しみです。読み終ると同室の患者さんたちにもお貸ししています。いい御本を読んでいますねえと感心されます。長く長く続けていけることを願っております。

(茨城 71歳)

浄土誌上句会のお知らせ

兼題

(季語ではありません)

金魚
西日
自由題

締切・二〇〇八年八月二十日

発表・「浄土」二〇〇八年十一月号

選者・増田河郎子(「南風」主筆)

応募方法

●いづれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句(何句でも可)と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊「浄土」誌上句会係

さっちゃんねネッ

52 かい目

かまち♡ひろう



主な家を中心で盆花たつ

岱潤

最近新聞の投書欄に寺院への批判が目立つような気がする。これはそれだけ感心がある証拠であり、悪いことではないような気がするが、やはり当事者である我々は、そうした批判にひとつ一つ丁寧に答えていくことが肝心であろう。

例えば先月朝日新聞の声の欄に「大衆を無視か 庭に入れぬ寺」という七十二歳の方の投書があった。引越してきた近所の由緒ある寺に散歩の途中立ちよろうとしたら、『関係者以外立ち入り禁止』の立て札に驚いたというものだ。「何故美しいお庭を拝見させてもらえないの

か、静寂な雰囲気の中で心の安らぎを得ようとしてはいけないのか。疑問を持つた」と書かれ、「鎌倉の大本寺が境内のトイレを有料の参拝人以外には使わせないそうだ。公益に無関心すぎないか」と続いていた。

寺側にも充分ないわけが出来るそうだが、この方の寺院というものに対する公共的価値、イメージはそれはそれで大切なものと言えるだろう。

私の寺でも今年、門を入ってすぐ横に東屋を造り、休憩所及び喫煙所とした。お檀家さんには大好評だが、近所のお寺さんからは、「知らない人が寝泊まりしちゃうぞ」と脅かされた。確かに賽銭泥

棒など多く、不用心には出来ない昨今である。寺が誰にでも門戸を開いてゆくとめには、多少の痛手を覚悟しなければ出来ない時代だ。(長)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤晃道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

浄土

七十四巻七八月号 頒価六百円
昭和十年五月二十日第三種郵便物認可
年費六千円

印刷

平成二十年六月二十日
平成二十年七月一日

発行人

佐藤良純
大室了悟

印刷所

株式会社 シーティーイー

〒一〇五〇〇一

東京都港区芝公園四・七 四明照会館内

発行所

法然上人鑽仰会

電話 〇三(三五七八)六九四七
FAX 〇三(三五七八)六三六
振替 〇〇一八〇・八・八二八七

雑誌『浄土』
特別、維持、賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
北山大超(焼津・光心寺)
加藤亮哉(五反田・専修寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・順行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
田中光成(町田・養運寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓爾(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
真野龍海(芝・天光院)
脇 博之(網代・教安寺)
水科善隆(長野・寛慶寺)
宮林昭彦(大本山・光明寺)
山田和雄(諏訪・貞松院)

(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://gekkan-jodo.info>

肉眼清徹

肉眼清徹にして
無量寿経

亜細亜大学講師
東京高輪・光福寺住職

生野善應

科学の力を借りると、
新鮮な感銘と発見がある。

百済くだら観音は、スラリとした優美なお姿で、左手に水瓶をやわらかくはさみ持つ手つきは惚れ惚れします。法隆寺のこの仏像は飛鳥時代（七世紀前期）第一級の国宝で切手の図柄にもなりました。

ところで、百済観音は、実は観音ではなくて、仏教的宇宙を象徴した虚空蔵菩薩こくうざうぼさつです。この仏像と光背を科学的に分析し、原型の形と色を立ち上

げた映像には目を見張ります。菩薩は目の大きい現代のお顔。光背は中央に水紋を表す同心円と周囲を火炎が燃え上がる造型を組み合わせたもの。宇宙を象徴した飛鳥時代人の構想に敬服します。科学の力を加えて、肉眼で別の角度から拝する新百済観音は魅力的です。

法然上人鑽仰会の

本

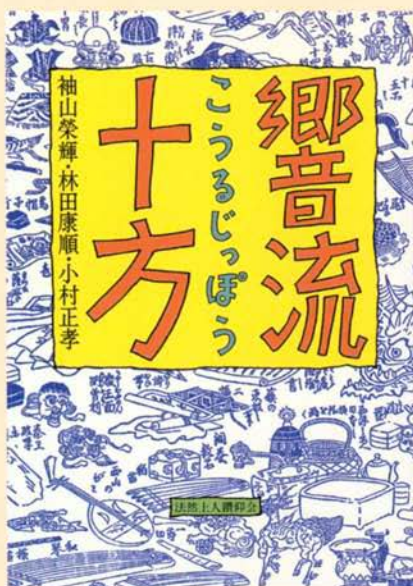
当会発行の書籍、雑誌
のお求めは、当会へ直接
お申し込みください。

なお、月刊『浄土』を除き送料は
含まれておりません。別途実費を
申し受けます。

法然上人鑽仰会

電話／03-3578-6947

FAX／03-3578-7036



響流十方こうるじっぽう
600円(税別)

『差出人は法然さん』
600円



月刊『浄土』
バックナンバー



『念佛讀本』完全復刻版
1,600円



※額装寸法 47×59cm



選擇集十六章之図(額入り)
『選擇集絵解き物語』含む
20,000円(別途梱抱料300円)



「法然上人絵伝絵葉書」
(8枚セット)800円



※浄土宗大本山増上寺蔵
「法然上人絵伝・残欠二巻本」より